



大阪市平野区で生まれ育った私は大学までずっと大阪で過ごし、1983年に毎日新聞社に入社。初任地の高知支局で初めて一人暮らしを経験し、大阪本社、東京本社、富山支局などを経て2008年4月から和歌山支局に単身赴任しています。



子どものころから、「小学校の先生」「落語家」「理科系の研究者」など、将来の仕事の夢はころころ変わって、そのころは全く予想もしなかった新聞記者という仕事に就いて30年近くになります。高校時代に、100年以上前の米国の実話をもとにした冤罪事件の映画「死刑台のメロディ」を見て、「弁護士になりたい」という夢を持って、理系志望から法学部に大幅転換しました。



ところが大学生を送っているうちに、自分には理詰めで突き進む根気がないことに気づきました。学校の授業だけでなく、いろんな本を読み、友だちや先輩達と交流。今では恥ずかしいほど青臭いも

の、お酒を飲みながら激論を交わしたりしました。さまざまなジャーナリスト、作家の作品を薦められるままに読んでいるうちに、「人と心を通わせながら文章で表現できる仕事」と漠然と考え、新聞記者が大きな選択肢となりました。ただもう一つ、大学に残っての研究者の道も捨てがたく、ずっと悩み続けて、結局決断したのは4年生の6月ごろでした。当時は就職協定が原則守られていて、特にマスコミは事前の会社訪問も受け付けず、11月解禁の試験の一発勝負でした。東京本社での最終面接では緊張の余り頭の中が真っ白になって、支離滅裂なことを発言。「こりゃ、落ちたわ」を帰りの新幹線からずっと落ち込み、「滑り止め」企業も全く用意していなかったので「1年留年して、来年は公務員試験を」と準備し始めたところで、まさかの合格通知をもらったのです。



学生時代から、そして仕事に就いてからも、本当にいろんな人々との交流が、私を育ててくれ、財産になってきました。仕事柄、さまざまな人と会う機会が

多いのですが、実は私は未だに引っ込み思案。特に疲れていたり、二日酔いでしんどい時、「今日、初対面の人に取材するのはおっくうや」とか、「市民集会の取材を予定しているけれど、しんどいなあ」と考えることが多いです。それを無理して行くのですが、今まで一度たりとも無駄になったことはありません。必ず新しい出会いに恵まれたり、思わぬ情報をもらったり、素晴らしい感動話を聞かせてもらったり……。



皆さんも、これからさまざまな仕事の道に就いていくことになるのですが、仕事や社会生活を通じて、人の輪が大きな礎になることは間違いありません。仕事に直結する交流や情報収集だけでなく、全く異なる市民活動、ボランティアなどにもどんどん首を突っ込んでみてください。実は私も、いろんな人と出会える職業に就いているのに、「新聞記者は結局、人の話を聞いて第三者的な文章を書くだけ。自分も当事者になりたい」と、いろんな市民グループに首を突っ込んでいて、それが回り回って仕事に役立つこともあります。



私は学校、市民講座、企業などで講演させてもらう際、必ず「かかりつけ弁護士を持ちましょう」と呼び掛けます。残念ながら民主国家の日本でも、無実の罪で逮捕されてしまうことが避けられません。決して他人事ではなく、私もあす冤罪に陥られるかもしれません。そんな時に唯一頼りになるのが弁護士。でも世間で弁護士といえば、「偉そうにして高いお金を取る」というイメージが強く、敷居が高いです。また、すべての弁護士が親身になってくれる保証はありません。一方、市民活動やボランティアなどには大抵、弁護士もメンバーになっているので、その活動を通じて知り合っていれば、いざという時に助けられることができるのです。



将来の夢に向かって、そして社会に旅立ってから、いろんな人々や本との出会いを大切にしてください。最後に、「人と話すのが苦手だから」という子、大丈夫ですよ。私は幼稚園でほとんど会話できず、小学校で同級生が遊んでいても「よせて（仲間に入れて）」といえず、中学、高校も一人ポツンとしている子でした。そんな私ですら、こうした仕事を続けています。いつかは殻を破れるはずですから、自信を持って歩んでください。

